当小児科を訪れた幼児肥満例の観察

研究協力者
京都府立医大小児科　楠　智一

当小児科では，昭和４２年以来，主として学童期，思春期の単純肥満児について，外来での栄養ならびに生活に関する個別指導をおこなっている。発足当時は，肥満の発生時期が「学齢期に入ってから」という例が大部分であったが，最近になり「乳児期から」，あるいは「幼児期から」という例が次第に増加している。過去１１年間に当科を訪れた幼児肥満例は，９０例とわずかの数であるが，若干の事項について整理をこころみた。

〔対　象〕

上記のとおり，当小児科肥満児外来を訪れた肥満幼児で，Hubble 指数により＋２０％以上の肥満度を示す者を対象とした。なお臨床的徴候，各種検査により症候性肥満と判定されたものは除外してある。

〔結　果〕

1. 幼児肥満例数の逐年的推移

年とともにその数も，全肥満児例数に占める割合も，ともに上昇する傾向を示している。

2. 上記Hubble 指数で算出した肥満度，およびカウプ指数の平均値を年度別に計算し，昭和４２年より４９年までを前期，５０年より５３年までを後期として比較すると，後期すなわち最近になる程高度の肥満幼児が増加している。

3. 初回来院時の肥満度と性別の分布

Hubble 指数で＋２０％代を軽度，＋３０～５０％を中等度，＋５０％以

上を高度として肥満度の分布をみると，前期・後期を通じて中等度以上が多く，また女児の来院数の方が男児より多くなっている。すなわち幼児肥満を気にして訪れる時期はかなり高度になってからであり，また女児の場合は幼少時からのふとり過ぎを気にする傾向が強いことが理解される。

4. 生下時体重

出生時の体重は平均以上のものが多く，いわゆる低出生体重児の例は，記載の明らかな８０例中３例のみであった。

5. 初回来院時の身長分布

１９７０年の乳幼児身体発育値に照らしてみると，９０例中３例を除きすべて平均身長を上廻っていた。従って幼児肥満の大部分の例では，学童・生徒にみられる単純肥満児の特徴を備えており，身体発育に関して一歩先んじたパターンを示していると考えられる。

6. 栄養摂取像

幼児の場合，とくに年齢が小さいほど，１日の食事摂取量，とくに間食や飲物類の正確な記録が難かしい。３歳児と５～６歳児について，栄養計算に耐えられる例のみをとり上げて集計したところ，３歳児では前期群の摂取エネルギー量や各栄養量は，いずれも後期群を上廻り，且つ「日本人の栄養所要量」（昭和４９年度栄養審議会答申）をはるかに越えていることがわかった。

それに対して５～６歳児では，肥満度やカウプ指数は後期群の方が高くなっているのに，栄養摂取量は前期群の方が多くなっていた。

7. 栄養・生活指導の効果

当科でおこなっている栄養・生活指導を受けた肥満学童生徒のうち著効を示したものは５２.１％，少しでも肥満度が減少したものは，３１.２％である。これに対し今回とり上げた幼児例では著効率は２１.１％となり学齢期以後のものに比べて著しく低い。これは幼児である上に大半が高度肥満もしくはそれに近い例であったことによると考えられる。

また数回の来院で脱落する例が５６％もあり，１年近く来院しても軽度に入れず停滞している例が２３％に及んでいる。但し指導によって少しでも肥満度が減少したか，少くとも進行が停止した例は９０例中７５例で８３％となり，消極的な有効率は必らずしも低くないことが理解された。

〔考案と結語〕

以上を通覧すると，一般に幼児肥満例は徐々に増加し且つ高度化していることが推定されるが，栄養摂取量の上昇よりも日常生活における運動量の低下がその要因として注目されるべきであろう。また治療および予防に関する対策にはかなりの困難をともなうにしても，そのこころみは決して無効のものではなく，関係者の協力によっては充分に進行を阻止し得ると判断される。

ここに述べたいくつかの知見は，一小児科外来へ，しかもみずから来院した例を通じての成績であるが，今後は本研究班による広汎な研究結果をふまえて，積極的な予防対策の検討が望まれる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

当小児科では,昭和42年以来,主として学童期,思春期の単純肥満児について,外来での栄養ならびに生活に関する個別指導をおこなっている。発足当時は,肥満の発生時期が「学齢期に入ってから」という例が大部分であったが,最近になり「乳児期から」,あるいは「幼児期から」という例が次第に増加している。過去 11 年間に当科を訪れた幼児肥滴例は,90 例とわずかの数であるが,若干の事項について整理をこころみた。